

特249

著 郎 太 德 倉

561

I

てい 就 に 教 宗

輯 一 第

ト ヲ レ フ ン バ 代 現 と 音 福

社 代 現 と 音 福

343

172



始



特249
561

福音と現代パンフレット 第一輯

高倉徳太郎著

I
宗教に就いて

福音と現代社



發刊の辭

前から企てゝゐた「福音と現代パンフレット」の第一輯をこゝに出すはこびになつたことを喜ぶ。福音的基督教を理路を追ふて知らんとする人々に、なるべく平易に、而も骨抜にならずに述べたいと願つてゐる。各題目に従つて順次に出すつもりである。どうか此の小冊子が福音宣傳の爲に、遍く有効に用ひられんことを祈つてやまぬ。時を得てもつと研究的なものを第二輯として出したいと願つてゐる。

宗教に就いて

一、はしがき

一言に宗教といつても高低深淺いろ／＼なものがある。木石や偶像を拜む低級な自然宗教から、世界の三大宗教といはるゝ回教、佛教、基督教の如き高尚なる倫理的な宗教に到るまで、その種類その段階は無數であるといつてよい。そして人類のあるところ宗教なきはなく、宗教は人類と共に普ねしといふべきである。學者の研究によると、人類の宗教生活の遺跡はすでに新石器時代に之を多く見ることが出来るといふことである。それ以來人類の文化は宗教とともに進歩發展して現在にいたつたのである。現にまた地球上如何なる種族國民の中にも宗教の行はれざるはないといつてよい。かく宗教は人類の生命となり來つたのであつて、之を無視して決して人類の文化

史を正しく解釋することは出来ない。

同時に一面には現代に於いて宗教が輕んぜられ無視せられつゝある事實も認めなければならぬ。これは現代の傾向にも歸因するし、また宗教を信するものにも責任がある。第一、宗教の根本は神を問題とし、我らに絶対の實在、見えざる世界を相手とすることを教うるものである。然るに現代人は、目に見ゆる相對的な物質的生活にのみ關心する。彼等にとつては、物質生活、經濟問題が唯一の力瘤を入れるべき事柄である。切實なる現實生活をしてゐると信する彼等にとつては、目に見えざる神を問題とする宗教はあまりに非現實的で、閑人の氣なぐさみの如く思はれるのである。併しこゝで詳述する暇はないが、現實的な物質的生活だけが我らの唯一の生活ではない。かゝる生活は動物にもあり得る。高き宗教が問題とするところの人格的生活、良心的生活、また永遠の生命こそ我らが切に求むべきより深き生活である。第二、また近代に於ける科學の發展から、凡てのものを合理的に説明しつくさなければ氣がすまぬ

のが、現代人の一特色である。彼等は科學的説明の網にかゝつて來ない凡ての現象を輕視し、これを虚妄と斷じ易い。勿論現時行はれてゐる宗教の中には随分迷信が多い。その日によつて凶吉を卜してみたり、病を治する爲に御札をのんだり、腐つた水を飲んだりする。かゝる迷信は當然排除すべきである。しかし人間の生命そのもの、不可思議を科學が解き得ざる如く、宗教の深き本質にひそむ神祕は、科學も決して説明しつくし得るものではない。宗教を信するものが、暗愚なる迷信に囚はれ、蝦で鯛を釣るやうな、功利的な、手前勝手な信仰に熱中してゐる時、その宗教が心あるもの、嘲笑の的となることも致し方ない。しかし高き宗教はもつと眞劍なものであつて、我らの倫理的な人格的要求に關はりあるものなるを思はなくてはならぬ。

二、宗教心の必然

詩篇には「あゝ神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂も汝をしたひ喘ぐなり。」といふ有名な句がある。神を慕ひ求むる心、即ち宗教心は我らの魂のうちに最

も深く秘められたる要求である。宗教心は外面から人の魂にくつつけられた渡金ではなく、我らの魂の生地存してゐる性である。渡金やペンキ塗なれば、時を経て剝けてくるが、宗教心は人性の本然に根ざせるものであるから、時にふれ機を得てますます強く發揮せられるものである。

それならどんなときに宗教心は醒むるであらうか。それはまづ我らが人生に於いて深刻な孤獨におそはれたとき神を求めざるを得なくなる場合が考へられる。我らのまはりに展開する「啞の如く沈黙」せる大自然に直面するとき、我らはどうすることも出来ない寂寞にとらへられる。天地の悠久に對して、如何に自己の生は弱小であり、その運命は悲惨であるか。我が生はどうしても永遠なるものに結びつかなければ、實に空虚である。また人間は社會的動物であると云はれてゐる。我らは我らに親しき友あり家族ありといふ。併し、我らの生來の性格たる主我的傾向が他の者との親しき交を妨げる。パスカルの云つたやうに、このまゝでは人生の最後は孤獨であり悲劇であ

る。我らは自己のうちなる凡ての思をことごとくうちあけ得るものを此世には有たない。最終に我らは皆單獨で墓にゆかなければならぬ。かくして人生の深刻なる解決はその孤獨に徹することにより神への途がひらかれねばならぬ。

また我らは何のために生き、何のためにこんなに苦まねばならぬのであらう。生きることは戦ふことであり、苦むことである。然もこんなに苦み乍ら人生の目的は確につかめず、力瘤の入れ所がわからずに空虚な暗い心が徒に支配する。時には生に倦怠を感じ、また人生に脅かされて不安と焦燥とで日々を送る。どこにも我らの生には確さと眞剣さがない。かゝるとき、生にまことの意義を與へ、確なる歩をなさしむるものは神への信仰である。トルストイはその懺悔録に云つてゐる。「私は神の存在に對する信仰を失つた時には生きてゐない。神を見出すことの微かな希望をもつて居なかつたならば、私はもう長い以前に自殺してゐる筈であつた。私は神を感じ、神を求めて居る時のみ、眞實に生きてゐる。」と。この言にある如く、神を信することは、人生

の関事でもなければ手段でもなく、最も眞摯なる生命の要求である。眞に生きようと思へば神を信せざるを得なくなるのである。次にまた人生に於ける最も聖なる事實は良心であり、人格であると信ずる。永遠なる時間の流と、無限なる空間との交叉する一點に生を托する我ら自身とは何であるか。科學的な唯物的な見地よりするなれば、原子と物質との偶然なる結合が、こゝに「我」といふ人間を組成したのである、酸素と水素と化合して水となる如くに。人間の死とはこの結合がもとの物質に還元することに他ならない。しかし嚴かなる人格の事實はかゝる解釋によつて説明しつくされてゐるであらうか、我らの良心は果してこれで満足し得るか如何。我らの人格には物質と物質との配合按排によつて解き去ることの出来ない神祕モラクスがくわはつてゐる。この人間をして人間たらしむる神祕は人格的なる神の實在をまつてはじめてその意義を明かにせられ、その根據を與へられるものである。

要するに我らが深き人格的なる生に徹せんとすればどうしても神を求めざるを得な

くなる。この人生に眞剣なる期待をかけるものほど、宗教に對して輕々しき態度をとる得ざる筈である。人が他の動物と異なる一つは、人の魂の窓が天に向つて開かれてゐる事である。宗教は人生の最も根本的なる事實であり、人性の癒すべからざる切實なる要求である。

三、諸 宗 教

先にも云つたことであるが、一概に宗教といつてもいろいろな種類が存してゐる。たとへば呪物崇拜といつて、貝殻や、羽毛や、木片などに精靈が宿れりとして崇拜するものもある。またトーテム崇拜といつて、ある部族にとくに因縁ありとして、天然物殊に動物をトーテムとして世襲的に崇拜するものもある。また自然崇拜として山や河や、土地や、風や、雷などを神として崇め祀る。其他我國に於ける祖先の靈をまつる祖先崇拜もあれば、希臘の神々アポロやウキナスの如く人間の像イガタをとつた神もある。以上の諸宗教は大體に於いて自然宗教ともいふべきもので、そのうちに靈的倫理的な

要求が皆無であるか、又は非常に乏しい。その宗教心の動機からいっても、主として功利的であるか、又は恐怖心に訴へるものが多い。即ち外界からくる壓迫とか脅威とかの實感から、これを神々のわざと恐れ、その怒をなだめる爲に神を祀るのである。然らざれば自分等の生活に幸福をもち來さんが爲に神をあがめる。家内安全、商賈繁盛の爲に神佛が信せられるのである。災難除けと御利益信仰とが現在でも如何に我が國の民衆を支配してゐるかを思うて見るがよい。

進んでまた高等なる宗教のうちには波斯教、回教、猶太教の如き律法教がある。これ等は人類の道德生活に密接なる關係をもち、これが基礎となり、その向上に貢獻をなせるものである。また新ブラトール教ことに佛教の如き解脱教がある。これらは深遠なる哲理を有し、純潔なる實際生活をなさしむる力をもつてゐる。そしてこれ等の諸宗教のうちにあつて基督教は倫理的唯一神教としてその獨特無比なる意義と使命とを發揮して來たのである。かく宗教は自然宗教から倫理的人格的宗教にいたるまでいろ

いろあるのであるが、宗教の高下眞偽をはかる標準は、その宗教が我らの人格的生活を正しく生かし、我らの良心を高めるか否かによつて大體きまると思ふ。恐怖心や功利的に訴ふる宗教が、我等の人格生活に交渉なく、むしろ之を墮落せしむるものであることは多言を要せぬ。また律法教も解脱教も徹底した意味では決して、我らの人格生活を基礎づけ、これに正しき内容を與へ、これを完成し得ない。たゞよく之をなし得るものは基督教のみである。

とにかく意外に思はるゝのは、相當に教養のある知識階級のうちに、現に随分迷信が行はれてゐることである。所謂御幣をかついで「大安」とか「友引」とかの日を氣にしたり、家相人相を問題にし、卜占によつて運命を決せんとするものが多い。實に愚かしきことである。しかし理知の啓蒙だけではかゝる迷信を必ずしも打破し得ないのであつて、高き眞の宗教の力のみよく迷信の蒙をひらくことが出来るものである。

四、宗教の本質

然らば宗教とは一たいどんなものであるか。難かしく云へば宗教の本質は何であるか。

ある學者は「宗教的要求は我らの已まんと欲して已む能はざる大なる生命の要求であり、嚴肅なる意志の要求である。」と言ひ、また宗教を「生きんと努力」と定義したる者もある。宗教を止みがたき生命要求として、我らの生に必然的交渉を有するものと見る點から、以上の如き宗教の説明は適切であるといつてよい。しかし宗教をただ生命要求として見るのでは、神は要するに人間の要求が造り出した主觀の産物となつて、その客觀的實在を妥當に認めることは出來にくい。また宗教は我らの生命を實現するものとのみ考へられない。神的實在の前にわが生命を捧獻せんとする願が宗教には存してゐる。生命要求として宗教を認めるのでは宗教に於ける自己否定の動機を説明し得ない。

それで次の如き宗教の説明がある。ジンメルといふ宗教哲學者は宗教とは「より高き實在への魂の直接なる自己歸服なり」といひ、メニヌといふ宗教學者は宗教とは「やみ難き要求からより高き諸の力を禮拜すること」であると定義してゐる。とにかく宗教にとつてかくべからざるものは、人間以上なる神的實在である。これを「聖なるもの」若しくは「神々しきもの」といつてもよい。この「より高き實在」「聖なるもの」とは人間を超越した何ものよりも確かなる客觀的實在である。これは最高價値であるとか、自己の生命要求を客觀化したものとかでなく、自己ならざる所謂「絶對他者」である。この「聖なる實在」は自我要求の延長として、若しくは外界の經驗から推論して達せられるものでなく、これらを絶したる特異なる實在として、我らにせまつてくるものである。言ひかへれば、自我意識または文化意識のやぶれるところに「聖なる實在」は經驗せられるのである。それで宗教的經驗とは、自我がはたらくといふ意識ではなくして、「聖なるもの」若しくは神のみがはたらくといふ經驗である。宗教的經驗はかくしてどこまでも恩寵經驗なのである。宗教とは神若しくは「聖なる

實在」と人の魂との交であるといつてよいが、この聖なる交の作者は神であつて、人ではない。神のみがはたらき、人は全く受身となるところに宗教がある。そして神と人との交には、人を超越する神に對する距離感と、同時にこの神にしたしく交るといふ接近感とがともにいかされてゐる。宗教的經驗の特色は、神に對する聖なる畏と信頼とがともに存するところにある。

五、マルキシズムの宗教批判の批判

詳しく述べることは出来ないが、マルキシズムの宗教批判に言及しよう。フォイエールバッハは神が自己に似せて人間を作つたといふのは偽で「人間が自己に似せて神を作つた」のだと主張した。神があつて人間があるのでなく、人間は自分の要求を客観化して神を作つたのである、神は實在でなく、幻影にすぎないといふのである。またマルクスの有名なる語がある。「宗教は抑壓せられたる生物の嘆息であり、又それが魂なき状態の魂であると等しく、それは無感情の世界の感情である。即ち民衆の阿片

である。」と。宗教は無自覺な愚昧なる民衆が悲惨なる現實生活より救ひ出されんが爲の氣慰に過ぎないとの意である。第一、若し宗教に於ける神が、自己の生命要求の延長として、自我に即して經驗せらるるものとせば、フォイエールバッハの宗教批判は當つてゐる。併し、先に宗教の本質の説明にいつた如く、神は自我ならざる他者として逼り來るものである。神の實在は自我があるよりも、世界が存するよりもより確かなりとして經驗せられるのである。文化意識に基く哲學の神、思索の神ならば、フォイエールバッハの批判の通りであるが、宗教の神に對してはその批判は見當違ひである。第二、宗教は民衆の阿片なりとのマルクスの批判は、人間の功利的動機、若しくは幸福要求を是認する如き低き自然教に當てはまるとしても、高き倫理宗教、即ち良心をいかし、人格生活を全うせしむる宗教には的をはずれてゐる。第三、マルキストはいふ、神は一定の社會關係、生産關係の必然的な所産である。たとへば資本主義社會に於いて壓迫せられ、搾取せらるるものゝ恐怖感が客観化せられて、神がうみ出されたのであ

る。故に今の生産關係が合理化せられ、人間自身が意識的に生産を指導し得る社會では、神は消滅してしまふのである。談何ぞ容易なると言ひたくなる。よし假に生産關係が全く合理化される時が來るとしても、人間に死がある以上、人性に矛盾と罪惡とがある以上、決して宗教的要求は無くなるものでない。マルキシズムの問題は主として相對的な經濟問題であり、宗教の問題は永遠なる魂の問題である。一方の問題が解決されたとして、他方の問題が當然に解決せられるとはいへない。兩者は問題の性質が根本的に違つてゐるのである。第四、マルキストは宗教を現在の生産關係より生ずる恐怖感より説明しようとするが、先に云つた如く宗教の本質であるところの、神と人との距離感は之で解き得るとしても、神と人との接近感はこれではどうしても説明出來ない。恐怖そのものである神を鹿の溪水を慕ふごとく、どうして人の魂は求めることが出來よう。活ける神に對するおそれおそれは所謂恐怖フイアではなくして畏敬オウである。神に對する畏敬と生産關係の缺陷より生ずる恐怖とはおそれの性質が全く異なるのである。

要するにマルキストは活きた宗教そのものを正しく認識せず、主觀的に自己の宗教觀を造りあげて攻撃してゐるといつてよい。第一、彼等は低き自然教にある宗教的動機(功利心とか恐怖とか)を直ちに高き倫理教にまで推し及ぼさうとするところに無理がある。第二、また彼等は宗教の本質そのものと、そのあらはれである宗教の形態化、組織化とを混同して、後者に對する非難をそのまま、前者に當てはめようとする。勿論兩者には密接なる關係があり、形式化し、墮落したる宗教の形態、組織はその宗教の生命を失はしむるものである。同時に強き新しき宗教的生命がうちに満つれば、これに伴ふ宗教の新しき表現形式が生れて來る。要するに宗教的生命そのものが本であり、その組織化は末である。若し宗教の具體的形態が、墮落し弊害を醸生するときはうちにある宗教の生命そのものが覺醒して、舊態を改革し、新しき形態を造り出すものであることを思はなくてはならぬ。

六、新宗教樹立の誤謬

それからいづれの既成宗教にも飽き足らずして、新しき完全なる宗教を樹つべきだといふ考がある。佛教、回教、基督教、いづれも特色があり長所がある。併しまたどの歴史的宗教にも缺陷あるをまぬがれないから、どの既成宗教にもとらはれず、各宗教の長所をとつて一丸となし、新しき完全なる宗教を造ればよいといふ考である。一寸考へればもつともものやうに思はれ、過去に於いても幾多の思想家がこれを企てたが一つとして現實性のある宗教となつてゐない。單なる理性宗教を考へ出すことは思想的には興味はあらうが、諸宗教の長所を取り混ぜたとて決して生命あり力ある宗教は生れて來ない。電機や飛行機ならば色々な様式を取り混ぜて完全なものを作ることが出來やう。併し宗教に於ては何等の個性なき折衷主義は微温的な妥協であつて無力である。宗教の眞の力と生命とは、その有する特異性にこれを求むべきである。またその宗教が眞に活ける力ある宗教であるならば、その眞理を、その人格と生活とに於いて徹底的に實現し得たる開祖若しくは創始者がなければならぬ。たゞ頭の中で諸宗

教の長所をとりませて、新宗教をつくるとしても、かゝる理性宗教は、所謂書齋の宗教であつて、決して我らの現實生活に光も力をも與へ得ないものである。佛國の有名人なる宗教家にして大政治家であつたタレランの所に或人が來て、當時の宗教の無力にして迷信的なることを罵倒して、新宗教の樹立を強く提唱した。タレランはそれを聽き終つて曰く、その新宗教を大いに宣傳せよ、併し、君はその新宗教の爲にイエスの如く十字架にかゝる覺悟があるのかと。彼は返す言葉なくして、すごとくと歸つたと云ふことである。この宗教の眞理の爲に凡てを捧ぐる眞劍さなくして、決して活きた宗教はたてられない。その創始者の體驗と人格に完全に具現せられたる歴史的宗教こそ、我らが全幅の信頼と期待とをかけ得る宗教である。

七、宗教と一般文化との關係

次に一般文化に對する宗教の特異なる點を簡叙しよう。

ブーセツトといふ宗教學者はかく言うてゐる。「宗教は最も根本的なる影響を人生

に及ぼして來た。凡ての人類の高等なる生活は、宗教と相結んで發達したと云つても過言ではない。人が母胎より生れ出でし如く、文明は宗教から生れ出でた。」この言の如く、一般文化と宗教とは切つても切れぬ關係があり、文化は宗教から展開して來たといつてよいのである。然も宗教と他の文化、例令科學哲學藝術道德などは自からその特色を異にする。第一、宗教も科學も共に或意味ではこの世界に興味を有し、その意義を推し尋ねようとする。併し兩者の興味を置く立場がちがう。科學若しくは哲學にとつてはこの自然及び人生が研究思惟の對象であつて、世界の起源またそれに内在する理法を推したづねんとするものである。然るに宗教はこの世界以上に、これを超越する「聖なる實在」との交を第一の關心となし、この經驗に基きて、多くの矛盾と缺陷とあるにかゝはらず此の人生と世界との可能性を問題とし、またその意義を認めんとするのである。第二、宗教と藝術とであるが、ゲーテが「人は宗教的なる間のみ詩と藝術とに於いて獨創的であり得る。」といったほど、兩者は密接なる關係に立つ

ともいへる。兩者とも現實世界を超越せる世界の實在を認め、魂がこの世界を體驗せんとするところは似てゐるといへよう。併し宗教に於いてはその禮拜、若くは信仰の對象たる神の實在の確實性といふことは、缺くべからざる條件である。然るに藝術に於いては必ずしも、そのゑがく世界の實在を必須とはしない。また藝術はどこまでも自我の創造するところのものであるが、宗教は自我が神的實在の前に屈服するところに存する。自我意識のやぶれるところに宗教の世界がある。また藝術は創造そのものに興味があるのであつて、人生の實際に直接に影響することを主たる關心としない。しかし宗教はどこまでも實際的な動機にかられて人の實生活に直接にはたらきかけるものである。

殊に密接なる關係にあるのは宗教と道德とである。宗教はたえず道德のインスピレーション靈感となつて、それに原動力を與へ、高き理想を提供した。また人の純清なる道德意識によつて宗教はその内容を深めて來たのである。カントが我らの良心を、我らを超越せる

神の無上命令と認めたとところに宗教と道德との必然な關係が暗示せられてゐる。かく密接なる關係にありながら、道德が即ち宗教でなく、良心がそのまま神ではない。宗教の第一の關心はどこまでも超人間的なる神的實在との交りであり、これにとらへらるゝことである。神そのものは善惡を超越し、然もこれが根基となり、之を可能ならしむる「聖なる實在」である。宗教的經驗の特色は聖なるものにとらへられ、これに絶對に依存するにある。かゝる意味でそれは他律的である。然るに道德意識はどこまでもその特色は獨立を重んじ自律的である。如何にして自己の人格を完成し、社會生活を圓滿にすべきかを中心の興味とする。それで宗教は道德の不完全なる状態、若しくはその僕ではなくして、道德に眞の力を與へ、これを高めるものでありながら獨自の嚴なる存在を主張するものである。かく宗教は道德意志から發生するものではないが、然も眞劍なる道德生活なくして高き宗教的體驗は得られざるものである。同時にまた眞劍なる宗教生活の根據に於いてこそ道德生活も可能となる。よく人はいふ、何

も悪いことをしないから宗教を信する必要はない、宗教なくとも道德生活をするに差支なしと。併し、所謂道德生活なるものをもつと眞摯に徹底的に考察せよ。然らば眞に正しき生活をなす爲には、如何に人は宗教に俟たなければならぬかがわかる。またもつと平俗な言は宗教なくとも食ふに困らぬといふことである。勿論宗教を信せずとも、日々を糊するに差支はない。併し同じ生きるにも動物的な生き方もあれば、神の子として人格的な生き方をすることも出来る。然らば我らは如何にして生くべきかといふ問題とともに、人として如何に正しく意義ある生活をおくるべきかといふ問題を解決しなければならぬ。宗教は第二の問題に根本的に答へ得るものである。要するに宗教に對するいろいろの疑惑は、宗教そのものを正しく認識しないところから起るものである。

八、基督教の根本的特色

最後に諸宗教の中にあつて基督教は如何なる特色を有するかを簡叙する。

宗教は神と人との人格的な交であるといつてもよい。そして先にもいつた如く宗教的経験の特色は、自我がはたらく意識ではなくして自我を超越せる神のみがはたらくといふ経験である。神が先手をうつてこの交を成立せしむるのである。人はたゞ神のはたらきにごかされて神との交に入れられる。そして神がそれによつて己の實在をあきらかにし人との交を可能ならしむるものを啓示といふ。啓示とは神から人に與へる記號、若くは言葉であると云つてよい。啓示は或宗教にとつて我らをかこむ自然界であることもあるし、各自の内なる良心や、偉大なる人格であることもある。とにかく人は神の與ふる啓示によつて神と交ることを得るのである。

然らば基督教は神と人との人格的交としての宗教を如何なる特色をもつていかしてゐるか。第一、フォルラートといふ獨逸の神學者は基督教の本質を、「イエス・キリストに於ける歴史的啓示の根據に於いて神との活ける現實的な交をなすこと」と説明してゐる。この定義に於いて歴史的事實を重んずる宗教としての基督教の特色がよく

あらはれてゐる。即ち基督教に於いては、神との交はイエス・キリストといふ歴史的人格に於いてなされるのである。基督教に於ける神との交の確さと力強さとがこゝに存する。基督教に於いては、我らに神との交を保證するものはイエス・キリストといふ歴史的人格である。イエス・キリストと云ふ再びくりかへすことなき聖なる歴史的事實は、我らの主觀的要求や思惟によつて左右することの出来ない嚴然たる神の啓示である。基督教の神經驗の磐の如き確さは、それがイエス・キリストと云ふ無比なる歴史的人格に基くところに存する。第二、基督教の神の内容が獨特無比である。この神は神の言なるイエス・キリストに於て自己を顯示したる天地の主なる聖なる父である。全能にして聖愛なる完全なる人格こそ基督教の神である。この神と交することはキリストとその十字架に於いて罪赦され、罪潔められることに他ならぬ。人は聖なる神を畏れ、罪を惡みつゝキリストに於いて罪贖はれて神を信じ、神を愛し、神に於いて隣人に仕へるのである。かくキリストに於いて神と交ることをゆるさるゝものは、ま

す／＼潔き強き良心を與へられて積極的なる人格的活動をなさしめられる。たとへば汎神論とか神祕主義に於ける神との交は、罪惡を問題とせざる非人格的な神との融合である。かゝる神との融合の體驗には、まことの確さなく、我らの人格に根基を與へず、また此の世界と人生とに對して倫理的な積極的態度をとらしめない。神との汎神論的な非人格的な融合一致は、世界と人生に對して無頓着ならしめ、つひにこれを否定せしむる、その實人生に對する態度は消極的な諦となつてしまふ。

要するに基督教は世界無比なる歴史的宗教、絶對なる啓示宗教といつてよい。その創始者として、その中心人格として神の獨子なるイエス・キリストを有する。この無比なる人格キリストに於いて、人は天地の主なる父なる神との聖なる惠まれたる交に入り、またキリストに於て他の人々との交にいる、これが基督教である。キリストとその十字架に於いて神に救はれ、主キリストを中心としたる神國建設の聖業に與かることをゆるされるものが基督者であるといつてよい。

生命と恩寵

天地の間で、生命の事實ほど不思議なものはない。生命は實に驚異である。やけたる砂地でも、一たび生命が動けば、番紅の花も咲き、緑の野邊ともなるのである。無限の太古から宇宙の根底には、自然のうちがには生命のいとなみがあつて、低いところからだん／＼高いところに進んで來た。古沼にうごくアミイバのやうな微生物から、木幹に喰ひ入る蟲となり、水に棲む魚となり、空飛ぶ鳥となり、野に驅ける獸となり、つひに人間にまで生命の脈は進んで來た。生命はその還境にはたらきかけ、またはたらきかけられて、そのうちから養分を吸ひとつて、自分を充實し進展せしめて來たのである。自然の底に貫いてゐる生命の流は、上へ上へのぼつていつて、終に人間の生命を押し出すやうになつたのである。

そこで思ふ。動物の生命にはなくて、人間の生命にのみ顯れて來た新しい生命の要

素は、何であるかと。その二つ三つを擧げる。まづ自意識とか、理性といふやうなもの、人の生命に始めて顯れて來たものと云へやう。人間は自然から生れ出で、自然の一部でありながら、なほ自然を理解し、之を理性によつて支配する能力を有つてゐる。人は「思想をもてる葦」である。自然の一部でありながら、その意識に於ては自然を超越してゐる。理性のうちに人の生命の偉大さをしのばせられる。次に「わが上なる星の輝く空」とその崇美を競ふ「わが内なる道德律」が、動物の生命にはないところのものである。動物は右にも左にも脱線せず本能の一本道を歩んでゆく。然るに人には道德上の自由が與へられてゐて、墮落することも出来る。完全はたゞ神に屬す。獸もまた獸として完全であらう、然し進歩は人にのみある。人間は斜面を歩むが如く、上るか、然らざれば下るかである。惡魔も天使も人間の達し得る範圍にある。道念あるが故に人の生命は動物のそれと異なるのである。良心を無視し、之を腐らしてしまへば、人間はやがて動物と變るのだ。それからまた動物の生命になくて、人のそれへの

みあるものは創造力である。人格の本質は自由と創造とである。人間の社會にのみ花咲く文化は、人の生命の奥妙なるはたらきである。動物社會は何千何萬年たつても、千遍一律少しも變らないが、人類の歴史は文化興亡の跡と云つてよい。唯物史觀にもなるほど眞理がふくまつて居よう、物質的の條件や制度が人間の創造力に大なる影響を與へることはあらう、併し之を決定する力は決して有つて居るものでない。文化を創造する力は人の生命に奇跡的に秘められてゐる。最後に人間の生命の最も深い要求は之を魂の形而上學的要求といつてもよからう。人は色身にかこまれ、有限な相對的な世界に生きてゐる。しかし彼の衷心には無限なもの、永遠なもの、絶對なものを求めねばをられない深い要求がよこたはつてゐる。鹿の溪流をしたひあへぐ如く、永遠者を慕ふ心、魂の故郷を求むる心、この心が人の生命の最も深いところにかくれてゐる。アウグスティンが懺悔録の始めに於いて「わが魂は汝(神)に於いていこふまでは平安を得ず」とさげんだ心はこの心である。これがとりも直さず、宗教心である。人が

もつと強く、深く永久に生きようとすれば、勃然として宗教的要求がおこらざるを得ない。生命への要求の徹するところに無限者へのみちがひらけてくる。

太古より宇宙の底を流れ、上へ上へと完成の爲めの飛躍をして来た生命は、人のうちに焦点をつくつて迸り出た。われはうちに自己の生命を諦視するときに、その神秘と崇嚴にむねうたれざるを得ないのである。「人、全世界をまうくとも、己が生命を損せば何の益あらんや」とのイエスの言は、いま洵に剴切にひゞく。人の生命は絶対価値である、他の何ものをもつても置きかへることは出来ない。宇宙の生命は人の生命を生まんが爲にどれだけ戦ひ苦しんで来たことか。「われらは土くれではあるが、一の閃光がこの土くれの中にきらめいてゐる」(ブラウニング)。われらの生命のうちには、神らしきもの、神に近きものがある。「神其儘の如くに人を創造たまへり」との聖句はかくしてその意味がしみじみと新しく味はるゝ。そんなら斯く人間にのみゆるされてゐる神的生命はどこから来たのであらうか。人の生命の出現の爲には過去幾億

万年宇宙は努力して来た。宇宙的生命は生みの苦をしてつひに人間の生命を結晶させた、宇宙の生命は人に於いて、集注し燃焼したのである。そして原始的なアミイバの生命が自然に變つて人の生命となつたといふだけでは説明がつかない。人の生命に達するまでには生命の流は幾多の不思議なる飛躍をなしてゐる。無から有は生じない。複雑な高尚な生命がだん／＼此の世界に顯れて来たのは、これまでなかつた新しき生命の要素が加はつて来たものと見ねばならぬ。おの／＼生命は還境の刺戟をうけて、その内容を充實し、その面目を發揮するのである。然らば人の生命の特徴である意識、理性、その道念、その創造力、その形而上學的要求はどうして顯れて来たのであるか。噴水はその水源より高くは上らない。人の生命の高級要素は、人以下の動物から来たものでもなく人以上の高級生命から導かれて来たものと念はざるを得ない。人の生命は天に向つて跳り、われらの心は、われ以上の大なる心に向つて開くのである。生命よく生命を刺戟し、心よく心を生む。われらの生命の純なる高級要素は下から来たも

のでなく、上から、神から來たものである。われらは自己の生命を眞實に見つめるときに、その源が神にあることに念ひいたり、かぎりなく之を尊びたく思ふであらう。

我等の生の深きところは、われ以上のものとなつてゐる、我らの生命の經には神的要素が、あみこまれてゐる。われらのうちなる生命にふかく見入るときに、われらは、自己ならざる、自己を超越したる神的實在に直面するであらう。そしてこの神的實在は自己より先にあつて、然も自己のうちには、たらいて來るものであることを悟るであらう。ブラザー・ローレンスは庭前にしよんばり立つてゐる冬枯の樹を見入つてゐるとき、いま死せる如き天地も春がくれば、一時に生命がうごき出すことを忽然として悟り、天地の底にみなぎつてゐる神的生命を直感することが出來た。この永遠なる神的實在は、我等の先きに、われらをはなれて嚴存するもの、われに對しては超越的他者である。この超越的な永遠者即ち神を見出し、そのうちに、われらの全存在をたくするのてなければ決して我らの眞の満足、平和は得らるゝものでない。アウ

グスチンはいふ「彼(神)と共にたて。さらば汝は立つを得ん。彼(神)に於てやすめ。さらば汝はやすむを得ん」と。舊約聖書の詩篇は、ひとの靈魂の生命の源なる神への熾烈なるあこがれに満ちあふれてゐる。「われ床にありて汝(神)を想ひいで、夜の更くるまゝに汝を深く思はん時、わが靈魂は髓と脂とにて饗さるゝごとく飽くことを得、わが口は欣喜の口唇をもて汝(神)を讃めたゝへん。」詩篇の作者の靈魂は絶入るばかりに、神の大庭を慕ふたのである。永遠者、超越者への思慕、傾倒の要求ほど、深刻な根本的な要求は他にないのである。神を求むる求めは、わが存在の中心に根をおろしてゐる。

我らの生命の源なる永遠者に對する我らの關係は、「それ」とか「かれ」とかいふ第三人稱のそれではなく、「汝」とか「あなた」とかいふ第二人稱のそれではなくてはならぬ。オ―神よ「なんぢ」はわが魂の力であり、望であり、平安である。永遠者を「天の父」として念ひ、慕ふにあらざれば、我らの魂は満足するものでない。之れを云ひかへれ

ば、われらの魂は永遠なる神との祈禱の關係に在るまでは、平安を得ない。神とわれらの魂とに人格的關係がなり立つときに宗教は生れるのである。祈は決して獨語でなく、神との對話である。祈は默想や坐禪とちがひ、神に向つて心を開き、神と話しかふことである。祈は意識的に生命の源なる神とわれらの魂とのつながりをつけるものである。祈のなきところに宗教はあり得ない。祈は人の生命をその源なる神につらならしむるもの、祈を通して、神の生命はわが生命と相應じ、相うつのである。アウグスティンに永遠者の聲がきこえた。「われ(神)は成年者の糧なり。生きのびよ、汝は我をくらはざるべからず」と。祈を通して神の生命が、わがうちにそゝがるゝとき、わが生命は「初には苗、つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる穀となる」といふやうに、だん／＼とのびてゆくのである。神の生命は決して靜的なものでなく、動的なもの、たえず完成に向つて前進するものである。また祈に於いて人の魂のうちにはたらく神の生命は、この世の生活を無視し、相對の世界に關係なくして實現せらるゝものでな

く、むしろ此の世のうちに、時間を踏臺として發揮せられる永遠の生命である。「年少きものもつかれてうみ、壯なるものも衰へをとろふ。然はあれど神を俟望むものは新なる力をえん。また鷲の如く翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず。歩めども倦ざるべし。」こういふ力強い生命は此の世のうちに、時を材料として實現せられてゆくのである。この世の事相に眼をつぶり、時を無視し、靜寂の境に安易をむさばるやうな魂には、決して生命は體驗し得ないのである。時のうちに永遠を、永遠のうちに時を生かさなくては、まことの生命に徹するものとはいへない。

生くることは戦ふことである。われらのうちを諦視するとき、そこに動物的な生命と神的生命と、もつれ合ひ、はじき合ひ、戦ひつゝあるのを識るであらう。下の方にひきづりおろさうとする力と、上へ引きあげんとする力とを同時に感ずる。全宇宙は神的生命を生み出さんが爲に、これまで戦ひつゝけて來た。いまもこの戦はわがうちにあつて戦ひつゝけられてゐる。かくてわがうちなる靈と肉との戦には宇宙的な意義

があるのである。わがうちに、神の生命はいま生みの苦をしつゝある。我らは此の戦をこまかしたり、回避すべきでない。神に於いて神と偕に此の戦を戦ひぬくべきである。神に於いて勝利はわが有である。十字架なきところに冠なし。

宗教はわが生命の最大要求に根ざしてゐる。神を求むることは、わが存在のやみがたき渴仰である。しかし宗教とか信仰とかを人の要求といふ方面からのみ考へてはならない。宗教に於いては人はたらくといふことよりも、神はたらくたまふといふことが、もつと眞實である。人が神を求めるといふことよりも、神が人を求めたまふといふことがもつとたしかなことだ。パウロはいふ「今は神を知り、寧ろ神に知られたり」と。神を識つたと念ふものは、未だ眞に神を識つてゐるとはいへぬ。神に先きに識られてゐることを知つたときに、ほんとに神を識つたのである。神を愛すると思ふものはまだ、神を眞に愛してゐない。神に先づ愛されてゐると感じたときに、始めて神をまことに愛することが出来る。かくて宗教の本質は恩寵にあることがわかるであ

らう。われらは自分で神を求めると思つてゐるけれど、神まづ、われらを求めたまはなければ、どうして我らに神を求めろ心ができよう。宗教とは神がわれらのうちにあつて、神みづからが神を求めることである。神の生命が、わがうちにはたらかずして、どうして、我らは神を慕ひ求めることが出来よう。神の創因、恩寵が我らの信仰を可能ならしむる要件である。トルストイの「我が宗教」や「懺悔録」を讀んで最も不満に感ずることは、恩寵にうらほうた心が、少しも現れてゐないことだ。生命を求めろ眞剣さは充分に認める、然し彼の宗教のいかに無味なることよ。彼の一生は、のがれんとする神を追ひかけ廻したやうなものだ。彼の神は、彼になか／＼顔をむけない。彼の懺悔録とアウグスチンのそれとを比べて見るがよい。アウグスチンの魂はホントに神の恩寵にひたりきつてゐた。彼のがれやうとしても神の恩寵は、彼をはなちやりたまはない。彼にとつて神の恩寵は不可抗的であつた。彼の罪に碎かれた魂は、いつも仰いで主の聖顔にまみゆることが出来た。信仰生活とは神の知遇に感激する生活で

ある。神の恩寵をはなれて、本質的な、永遠な何ごとをも爲し得ざることを信ずることが信仰である。

宗教は神が人を求めたまふことだ。恩寵の追求、そこに信仰がいきてゐるのだ。人が神の顔をさがす前に、神の方からそのかゞやける顔をわれらの方にむけてをらるゝ。そんならどこに神の聖顔を仰ぐことが出来るか。私たち基督者の確信するところによれば、イエス・キリストの御人格に於いて、神はわれらに、その聖顔をむけてをらる。『それ神の満足れる徳は、ことごとく形體をなしてキリストに宿れり。』生命は

コンセントレション 集注である。神の生命は生れんとして苦み、戦つて來た。この生の苦は報いら

れて「言」ロヨスが肉體となつた。神の人格的な生命はイエス・キリストの人格とその十字架に於いて燃焼した。彼はいふ「我は生命のパンなり——天より降りし活けるパンなり」と。キリストの聖き生命にふれることは、まことに神そのものにふれることである。キリストを食ふことは神そのものを食ふことだ。「未だ神を見し者なし、たゞ父

の懷裡にいます獨子の神（キリスト）のみ、之を顯し給へり」とヨハネはいふ。げにキリストは神の聖顔である。「イエス・キリストの顔にある神の榮光」を仰ぎ得るとは何たる祝福ぞ。宇宙は、人類は、ながく／＼神の顔をたづね求めて、あゝいで來た。いまその祈願は十二分にみたされたのである。バスカルが三十一歳のある夕、回心したとき書きのこして置いた斷片を想ひ出す。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神——哲學者、賢人の神にあらず。確實、確實、イエス・キリストの神はわが神、汝の神は我が神ならん。神はたゞ福音によりて示されたる道によりてのみ見出さるべし。」バスカルの求めたのは、哲學者の神ではなかつた。單なる價值としての神ではなかつた。啓示の神、恩寵の神、イエス・キリストに於いて、聖顔をむけたまふた神を彼は熱烈に求めたのであつた。求めて、こたへられたのであつた。

自己をみつめること、自己の生命をうちに直視することは、眞實なことであり、とうといことである。併しこれだけでわれらの精神問題は決して解決するものでない。

われらは自己を見つめる眼を上にも向けねばならぬ。仰いで神の聖顔を見つめねばならぬ。下向ける魂はいかに眞實であつても、まことの生命に徹することは出来ない。上を向け、神を求めよ、キリストの顔に直面せよ。救は上より。いまの世に最も缺けたるものは仰ぐ心だと信ずる。人間的なもので、凡てを掩ふてしまふて、神的なもの、前にひれ伏す嚴肅な心を、天を畏るゝ心を今の若き心は失ふてゐる。人間禮讃は自己禮讃となる。センチメンタルな弱き心を追ひはらへ。自己實現、自己完成がわれらの人生原理だといふか。これでは駄目である。人生究極の原理は聖なる神への禮拜にあり、犠牲にあり、主の十字架にありと念ふ。神の聖き生命は、自己を獻ぐべき見えざる祭壇を求めてゐる。ウキリアム・ペンはいふ、「禮拜は人生の至高の行爲なり」と。もう一つブラウニングの詩を加へる。「人は神でなくて神の目的に奉仕すべきものである。従はねばならぬ主があり、取らねばならぬ道がある。」

(一九二五・三・四)

追記。今にして思へば此文章は大變物足ない。信仰上のロマンチズムが多分になつて不徹底である。生命と恩寵といつても、人の生命のうちに深刻によこたはつてゐる罪惡、人性の二律背反についてこゝには言及してゐない。従つて恩寵の考も不徹底である。我らに先だちて我らを求むる神が恩寵の神だといふのではない。恩寵の神とは我ら如き罪人を求め、これをキリストの十字架によつて贖ふ神である。それで自己の生命をいくら見つめてもそこに神はなく罪あるのみである。自己の生命のうちに何等自己を救ひ得るものなきを痛感せる魂のみが、キリストの十字架を仰ぎて、神の恩恵によくし得るのである。また此文章に於ける神は嚴密な意味で、聖書の神とはなつてゐない。主イエス・キリストに於いて自己を顯示する天地の主なる聖なる父こそ聖書の神である。併し以上の文章で宗教が人の生命の必然なる要求に根ざすものであることが少しでも明かになればよい。

昭和六年十二月十七日印
昭和六年十二月二十五日發行

福音と現代パンフレット

(第一輯) 奥付

〔定價 金拾錢〕

著者

東京府下淀橋町柏木九四八番地
高倉徳太郎

發行者

朝鮮全羅北道金堤郡月村面
樹富安左衛門

版權所有

東京市牛込區早稲田鶴卷町四四二番地

印刷者

横澤藤盛

印刷所

明正社印刷所

發行所

東京府下淀橋町柏木九四八番地

福音と現代社

振替東京三一九六〇番

終